

田中一村展 奄美の光 魂の絵画

東京都美術館 24.09.19~12.01

「田中一村」(1908~1977)は、生涯独身で自らの芸術の探求に生涯を捧げた孤独の画家で、世俗的な栄達から距離を置き、我が道を歩んで描き続けた画伯の生涯は、「不屈の情熱の軌跡」と言えるものであったとされている。



《アダンの海辺》 1966年 絹本着色

左図

海原が静かに小さな起伏を繰り返し、輝く砂礫が浜辺に並んで「アダン」の葉が緑~青の幅広い色調を呈して広がっている。ありふれた風景に眺めて飽きることのない無限の表情を与え尊い存在へと高める。奄美の海に満ちる光こそ、この絵の主題なのであろう。

《初夏の海にアカショウビン》 1967年 絹本着色 中図

画伯が好んでスケッチを重ねた花と鳥、すなわち「キダチチョウセンアサガオ」(ダチュラ)と赤い鳥「アカショウビン」に、背後には「ガジュマル」の気根を配している。制作に専心する生活に入った59歳の作品で、遠くを見据える鳥に画伯の姿を重ね、花々が彼を見守りエールを送るような一幅である。

《ニンドウにオナガ》 1956年頃 絹本着色 右図

ウワミズザクラにとまるオナガに、エゴノキ、ニンドウの白い花が美しい。画面上部にハグロトンボが見える。丁寧に描かれた画面はあくまでも明るくて、絹地の発色の良さはひとしおである。樹間と鳥の構図に奄美作日の原型を見る思いである。